

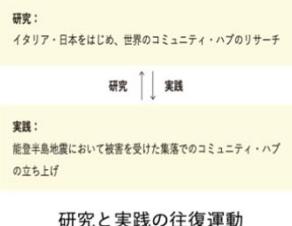
21世紀のコミュニティ・ハブ研究拠点

拠点長：大西麻貴（Y-GSA）

研究メンバー：Andrea Bocco（トリノ工科大学）、寺田真理子（Y-GSA）、Martina Bocci（元トリノ工科大学）

研究の目的

本研究拠点は、人口減少社会において、行政のつくる公共施設のみならず、住民が自治的に立ち上げるローカルな居場所がコミュニティ・ハブとして重要な役割を果たす必要があると考え、インクルーシブな場所づくりに先進的なイタリアを中心に世界各地のコミュニティ・ハブのあり方を研究するとともに、それを能登半島地震の被災地において、実践として展開することを目的とする。



イタリアでの先行事例視察（2025年5月）

2025年5月イタリアのトリノ、ジェノヴァ、ボローニャをY-GSA学生8名とともに訪問。トリノ工科大学アンドレア・ボッコ教授、現地在住の批評家多木陽介氏とともに、コミュニティ・ハブの先行事例として、複数の地区的家、ラボラトリオ・ザンザーラ（障害者就労支援）、サラボルサ図書館等を訪ね、運営者へのインタビューと空間リサーチを行った。リサーチで得られた知見は、各学生のスタジオ課題におけるケーススタディ提案に活かされたとともに、今後能登での実践へつなげられていく。



アンドレア・ボッコ教授による、トリノの都市史のレクチャー



ヴィア・バルテアの地区の家（トリノ）にて運営者にインタビュー

21世紀のコミュニティ・ハブとは

1. **open to all citizens** 全ての市民に開かれている
2. **active participation** 能動的な参加
3. **accessible, welcoming and generative** アクセスしやすく、あたたかく、生成的
4. **no single users of any place** 一人ではなく、誰かとともに利用する場
5. **diverse project** 多様なプロジェクトが展開する
6. **operators as “competent social artisans”** 「ソーシャルな職人」としての運営者
7. **intermediate between public and private** 公と民との間をつなぐ
8. **some economic autonomy** ある程度の経済的に自立性
9. **rootedness in the territory** その土地に根ざしていること
10. **own form of governance** 独自の自治のためのルールを持っている

能登半島地震の復興支援活動（2024年2月～）

2024年度は、富山大学萩野紀一郎教授の協力の下、輪島市を中心に能登に通いながら、まずは倒壊家屋からの古材レスキューや、倒壊した醤油蔵の再生など、求められる復興活動に寄り添いつつ、地域との関係づくりを進めた。2025年度は、引き続き輪島市その他、珠洲市の仮設住宅を訪問しあ茶会を通してヒアリングしつつ、より具体的な地域のニーズを拾い上げながら、実際のコミュニティ・ハブづくりへつなげていこうと考えている。



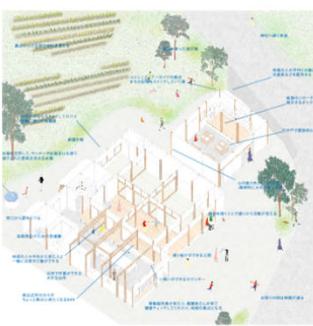
富山大学萩野教授の指導のもと、倒壊家屋から古材をレスキュー



輪島市三井の集落の皆様にご挨拶および集落についてのヒアリング

能登半島における21世紀のコミュニティ・ハブの実践に向けて

空家・引持邸（輪島市三井）の改修計画



Y-GSA学生とともに改修案を設計

輪島市三井の集落に残っていた空家を地域に開かれた滞在拠点とすべく、実測、提案づくりおよび地域への発表、掃除を進めている。提案にあたっては、地域の民家形式および周辺環境をリサーチ。地域に根ざした居場所づくりを目指している。



引持邸の清掃

親子の活動・交流の拠点づくり（珠洲市） 2025年12月仮オープン予定



Y-GSA学生とともに遊び場とライブラリを設計

発災直後から珠洲市を拠点に支援活動を進めるNGO団体「ビースト・インズ・ジャパン」とともに、珠洲市協力の下、元葬祭場を親子の活動・交流の拠点として改修する計画を進めている。2025年12月に遊び場エリアは竣工し、オープン予定。



遊び場エリアのイメージ

今後の展望

・イタリアおよび日本でのコミュニティ・ハブリサーチの学びを、実践的な本としてまとめる予定。
(アンドレア・ボッコ氏、多木陽介氏、大西麻貴の共著。)

・能登半島での21世紀のコミュニティ・ハブ実践の具体化を進める。ハードはもちろん、活動や運営方法についても、運営メンバーとともに議論し、どうすれば持続可能な場所として展開可能かを引き続き検討していく。